吾輩は猫である。名前はまだ無い。どこで生れたかとんと見当がつかぬ。何でも薄暗い

じめじめした所でニャーニャー泣いていた事だけは記憶している。吾輩はここで始めて人

間というものを見た。しかもあとで聞くとそれは書生という人間中で一番獰悪な種族であっ

たそうだ。この書生というのは時々我々を捕えて煮て食うという話である。しかしその当

時は何という考もなかったから別段恐しいとも思わなかった。ただ彼の掌に載せられてフー

ワと持ち上げられた時何だかフワフワした感じがあったばかりである。掌の上で少し落ち

いて書生の顔を見たのがいわゆる人間というものの見始である。この時妙なものだと思

った感じが今でも残っている。第一毛をもって装飾されべきはずの顔がつるつるしてまるで

瓢箪だから仕方がない。鼻の穴が大分一方に偏倒している。口は大きい方だろうが口の

周りがむやむやしている。目はまん丸く開いてるだけで何の表情も出ない。まあ

やはんだ。その後猫にもだいぶ逢ったがこんな片輪には一度も出会わしたことがない。のみ

ならず顔の真中があまりに突起している。そうしてその穴の中から時々ぷうぷう煙を

吹いた。どうも始末に悪かった。これが人間の飲む煙草というものであることは

やがてこの頃知った。この書生の掌の裏でしばらくはおとなしく坐っていたが、しばら

くすると非常な速力で運転し始めた。書生が動くのか自分だけが動くのか分らないが無暗に

目が廻る。胸が悪くなる。到底助からないと思っていると、ぐちゃと音がして眼から火が

出た。それまでは記憶しているが、そこは何の事やらいくら考え出そうとしても分らない。

ふと気付いて見ると書生はいない。たくちゃった兄弟が一匹も見えぬ。肝心の母親

ちえ姿を隠してしまった。その上，今までの所とは違って妙ちゃかに明るい。眼を開いて い

られぬくらいだ。はて何でも様子がおかしいな，のその変い出して見ると非常に潮い。
吾輩は藁の上から急に笹原の中へ棄てられたのである。

もうやくの思いで笹原を這い出ると向こに大きな池がある。吾輩は池の前に坐ってどう

したらよかろうと考えて見た。別にこれという分別も出ない。しばらくして泣いたら書生

く ても声が出ない。

その うさ池の上をちらちらと風が渡って日が暮れかかる。腹が非常に減って来た。泣きた

が また迎に来てくれるかと考えた。ニャー，ニャーと鳴かにゃって見たが誰も来ない。